



2014年6月11日放送

頻用処方解説 竜胆瀉肝湯

大分大学医学部附属病院 漢方外来

織部内科クリニック 院長 織部 和宏

今日は竜胆瀉肝湯についてお話させていただきます。前々回、前回と四物湯ベースのお話をしたわけですが、竜胆瀉肝湯は明の時代の『薛氏十六種』の方剤で、当帰、地黄は四物湯の中の2つですが、あとはそれ以外ですので、必ずしも四物湯と関連した処方とはいえませんが、非常に使うチャンスが多いので今回取上げさせていただきました。

構成生薬は、当帰、地黄、木通、黄芩、沢瀉、車前子、(竜胆瀉肝湯の名前がありますように) 竜胆、山梔子、甘草からなっています。

どういうときに使うかということですが、応用編としては膀胱炎とか、あるいは膀胱・尿道・子宮の膣部など主として臍から下、下焦における炎症に用いるもので、実証、虚実中間、虚証では実証用の方剤です。特に昔は、淋病、淋疾性の疾患によく頻用されていました。ですので、急性とか亜急性の尿道炎とか膀胱炎、男性では前立腺炎、婦人科でよく使うのがバルトリン腺炎や臭いの強いおりもの、陰部・局所の痒み、ワギナの炎症などに用いられています。

戦前は、梅毒とか淋病といった性病や、男性においては睾丸炎、陰部湿疹、トリコモナス等に应用されていたようです。

ですから、適応は下焦の種々の炎症で実証性に使われますので、充血しているとか、腫れているとか、痛みがあるといったものに使われています。即ち急性、亜急性の炎症で実証のものに用います。

以前私の友人が花柳界で遊びすぎて尿をする時に局所が痛いということで訪ねてきたことがありました。尿を見ますと、細菌は出ていなくて、白血球だけ出ていて、クラミジア

かなと思ひ、症状を取る炎症を抑える意味で竜胆瀉肝湯と抗生物質クラリスロマイシンを出したところ、すぐ良くなったという経験がありますので、このような不心得者用の薬にもなります。

また、私が良く使っているのは、亜急性の前立腺炎、前立腺肥大が西洋薬でなかなか治らない時に使っています。ただし、前立腺肥大に使う時には、八味地黄丸とか猪苓湯とかいわれていますが、この竜胆瀉肝湯も実証タイプにはよく使っています。その時には、瘀血を伴っていると考えると桂枝茯苓丸加薏苡仁を併用すると良いと思います。

また、亜急性の前立腺炎に竜胆瀉肝湯は結構効きますが、それだけでもう一つ効果が出ない時には周辺の瘀血を取る意味で、便秘があった方がよりいいのですが、便秘がなくても大黃牡丹皮湯を併用すると非常に効果を発揮します。

使うポイントは、下焦の湿熱、肝胆の湿熱といわれていますが、肝胆経に沿った腹直筋の外側が非常に突っ張っている感じがある腹診所見、そして下腹に少し抵抗圧痛があるのをポイントに投与します。当然、脈もお腹の力もしっかりしている実証タイプに使うことと、下焦、下腹に炎症所見があるのがポイントです。

具体的にどういう働きをするのかというと、これは生薬構成から考えてみると、この中に車前子、木通、沢瀉が入っていますが、これは尿を出す作用、利尿作用があります。また、当帰と地黄は四物湯の中にも含まれていますが、血の流れを非常に盛んにします。しかも利尿作用と血の流れをスムーズにしますので、下腹の炎症、特におしっこをする時のしぶるような痛みを緩和します。それに、消炎作用を発揮するのが竜胆、山梔子、黄芩の苦寒剤です。

これらの組み合わせから竜胆瀉肝湯は、実証タイプの人の下焦、下腹の種々の熱性炎症性疾患に使うことができる構成ですので、そういうことを目標に使うと良いわけです。ただし、江戸時代ではないので、必要に応じて抗生物質等を併用した方が無難です。

さて、原典の『薛氏十六種』の下疝門に取り扱われていますが、どう書かれているかというと、「肝経の湿熱、或は囊癰、便毒、下疝、懸癰、腹痛欣くが如く作り、小便渋滞、或いは婦人陰瘡痒痛（バルトリン腺や大陰唇の炎症）、男子陽挺腫脹（陰茎の腫れ）、或は膿水を出すを治す」と書いてあります。

浅田宗伯（1815-1894）の『勿誤薬室方函口訣』では、「肝経湿熱が目的であるけれども、湿熱の治療には三種類あり、上の方に向かっていく場合、表の方に行く場合、下腹に下ってきて種々の性的病気を起こすといった病態ですが、この竜胆瀉肝湯は湿熱が特に下焦に下りてきて種々の病態を生じるときに使う」と言っています。

よく一貫堂医学の竜胆瀉肝湯と混同されることがありますが、一貫堂医学にはこの『薛氏十六種』を加減したものに温清飲をかぶせたような内容となっています。また、肝経の湿熱ですので、この力をパワーアップするためには四逆散と一緒に併用したり、炎症が少し強いときには薛氏十六種の方ですが温清飲をかぶせるといった使いかたでパワーアップするわけです。

では、どのようなケースに使われるかという点、先ほど述べましたとおり、女性では炎症性の非常に臭いおりものが出るとか、男女とも尿道炎で尿をする時にしぶるとか膿が出るとか、女性の場合はトリコモナスやバルトリン腺の炎症とかになります。ただし、男性で内科医の私はそのような部位を診ることができないため、実際の治療経験はあまりありません。処方する場合は症状と腹部所見に基づいております。

淋病とか非淋疾患性尿道炎とかに関してはしばしば使うチャンスがあります。また、意外と使えるのが慢性肝疾患で、これを得意としたのが矢数格先生（1893-1966）などです。格先生は肝硬変で腹水がたまった症例にこの竜胆瀉肝湯を使ってきれいに良くしたという報告をされています。慢性肝炎でも少し炎症症状が強いようなときに私もしばしば使っていますが、その際には、四逆散と合方して非常に効果を発揮しています。又、帯状疱疹にも使うチャンスがあります。